

ブルデューの資本概念再考
平石 貴士（立命館大学大学院）

20世紀において唯物論はマルクスの名と資本の概念によって考えられるようになった。フランスの社会学者ピエール・ブルデュー(1930-2001)は社会学の分野で「文化資本」の概念を考案した学者として有名である。ブルデューの文化資本概念は最初は1960年代フランスにおける学生の学業成績と出身階級との統計的相関を説明するための概念として考案された。その後、彼の資本概念は、「ハビトゥス」「界」といった彼自身の独自の用語と相互規定の関係を持ちながら発展していったが、その理論的展開についてはあまり知られていない。例えば、文化資本についての最も皮相な受容の例を上げれば、文化資本は社会階層研究のなかで「学校に通った年数」という統計的変数として理解されてしまっている。およそ、この水準で彼の資本概念を考えている上では、マルクスの資本概念との間に連関はないように思える。

本報告は、社会階層研究におけるそれらの受容とは離れて、ブルデューの資本概念とマルクスの資本概念のあいだの連関を探求する。ここでの研究の目的は、資本の解明について役立つ諸概念を探求することであるので、どちらかに軍配を上げることを目的にはせず、予備的作業としてブルデューの資本概念を整理する。

ブルデューの資本概念の特徴は以下のものである。1)人間の知識、技能、センス、身のこなしなどの形態においても資本の蓄積が起こる(身体化された資本)、2)信頼、名誉、認知といった形態においても資本の蓄積が起こる(象徴資本)。3)資本が資本となるのは「界」という社会的関係においてのみ可能となり、「界」ごとに独自の種類の資本が存在する。4)各種類の資本は相互に転換し合う関係にあり、転換には固有のコストがかかる。また、多くの場合、その転換様式は隠蔽されている。5)彼の資本の「関係論的」定義は、社会統計による分析を基盤にして考案されている。6)国家はそれ自体巨大な資本の蓄積場所であるだけでなく、領土内の資本の運動を方向づけている。

マックス・ウェーバー以来、資本制生産を可能にする人間のエートスが社会学の領域では問題にされてきたが、エートスを人間のうちに蓄積された資本として考えることは、二次大戦後のフォードシステム型マルクス主義文化のなかでは考えられてこなかった。

ブルデューとマルクスによる資本の分析をつなぐ共通点としては以下のものがある。1)資本は時間と労働の蓄積であり、時間当たりの生産性の増大と関係がある。2)資本間の転換が起こるのは根底に共通の尺度である労働の蓄積が存在していることによる。3)大きな資本はより生産性の高い長期生産のサイクルに入ることができる。4)資本が生み出す利潤は、慣習や法によって、領有する権利が規定されている。5)生産関係が成立するためにはイデオロギーと生活手段によって集団を統合することが必要であるため、集団形成の論理は社会的闘争を決定する要因となる。